

さばきの習性とキリスト者

施しという愛の業、祈り、断食という宗教行為に入り込む偽善の罪（マタイ6：1～18）および日常生活における神への信頼の欠如から来る思い煩いの罪（6：19～34）に続いて、キリスト者が陥り易いもう一つの罪として主イエスは、マタイ7：1～5で人をさばく罪を指摘された。私たちの中にある「人をさばく」という習性が、人間関係の中にかに不幸な争いと断絶を引き起すものであるか、また引き起こしてきたかを、私たちはよく知っている。

「あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中にある丸太に気づかないのか。兄弟に向って『あなたの目からおが屑を取らせてください』と、どうして言えようか。自分の目には丸太があるではないか。偽善者よ、まず自分の目から丸太を取り除け。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からおが屑を取り除くことができる」という主イエスの御言葉は、私たちに対する大きなチャレンジのことばである。

ここで「おが屑」（カルフォス／口語訳では“ちり”）とは実に小さなホコリのことであり、また「丸太」（ドコス／口語訳では“梁”）とは大きな障害物のことである。そのような大きな障害物を自分の目に持ちながら、他人の目にある小さなホコリをつついて取ろうとする、これは実に強烈な皮肉（アイロニー）である。ロイド・ジョーンズ博士は言う、「主のこの教えによって、私たちは自分の罪深さを悟らされ、罪というものの醜悪さを見せつけられる」と。その通りだと思ふ。

私たちはなんとしばしば、自分の罪や過ちを棚に上げて、他の人の罪や過ちを容赦なく批判してさばいてきたことであろう。ときには親切をよそい、時には愛の名を借りて、時には正義の擁護をよそって、他人を批判し、さばく。そしてそのことによって、他人を傷つけ、悲しませ、苦しめてきたことであろうか、と深く反省させられる。

或る注解者が言うように、私たちは、しばしば自分を裁判官の席において他人を責めようとする習性を持っている。裁判官の席に座って兄弟をさばくが、しかし実のところ、自分の座るべきところは裁判官の席ではなく被告席であること、神の前には自分もまた被告席に座らなければならない存在であることを忘れてしまうのである。主イエスは上記のことばによって、このことを私たちに指摘されるのである。

キリストの恵みによって赦され生かされている者として、私たちは次の使徒パウロの言葉も覚えたいと思う。「あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。互いに忍び合い、責めるべきことがあっても、赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたも同じようにしなさい。これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。」（コロサイ3：12～14）。